

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00586

研究課題名(和文)現代モンゴル語書きことばの形成

研究課題名(英文)Formation of the writing language of modern mongolian

研究代表者

呼和巴特爾 (HUH, BATOR)

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：80338540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：現代モンゴル語書きことばの形成の問題は、モンゴル国憲法における「国家公用語」である「モンゴル語」の実態を知る上で重要であった。モンゴル国「モンゴル語関連法」でこの「国家公用語」は「現代文学モンゴル語」と定義された。しかし、この「現代文学モンゴル語」はこれまで使用されてきた「現代モンゴル語」「モンゴル文学語」とどう違うのか。本研究ではモンゴル語の「言文一致」のプロセス等について考察することにより「現代モンゴル語書きことば」の実態に迫り、「現代モンゴル語」という概念の解明に書きことばの視点からアプローチした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「日本語」等がそうであるように、「モンゴル語」という名称も「モンゴル文語」、「現代モンゴル語諸方言」を含む意味で使用されてきた。しかし、現代社会で「日本語」や「中国語」は古代日本語や漢文でもなく、特定の方言でもなく、実際、「標準語」としての現代の書きことばを指す意味で使用されている。このような状況を考えれば、モンゴル国で憲法における「モンゴル語」が法的に定義を求められるのは必然的なことであった。しかし、このような専門性の高い問題に対する法的定義づけには限界があり、本研究は、歴史社会言語学の視点から「モンゴル語」の認識に理論的根拠を与えたと考える。

研究成果の概要(英文)：The problem posed by the formation of modern Mongolian as a written language is important for understanding the true nature of “Mongolian” -- the “national official language” as stated in the Constitution of Mongolia. This “national official language” is defined as “modern Mongolian literature” in the “Mongolian-related law” of Mongolia. However, the question is raised -- how does “modern Mongolian literature” differ from the “modern Mongolian” and “Mongolian literature” that was used hitherto? In this study, we approached the reality of the “written language of modern Mongolian” by considering the process of “unification of the spoken and written languages,” and elucidated the concept of “modern Mongolian” from the viewpoint of written language.

研究分野：モンゴル学 社会言語学

キーワード：現代モンゴル語の書きことば 現代モンゴル語 言文一致

1. 研究開始当初の背景

アジア諸国で日本と中国、韓国・朝鮮などいくつかの国を除いて、自らのことばを政治、経済、社会、教育、学術など現代社会の諸分野で十分機能できる近代国民国家の「国語」まで作り上げた国は多くない。モンゴルは北アジアの遊牧民族であるが、21世紀のグローバル社会に機能できる「国語」としての「モンゴル語」をもつようになっている。それは、20世紀において、ロシアと中国周辺の諸民族がソ連と中華人民共和国の一部となったのに対し、唯一モンゴルだけが奇跡的に独立を果たせたからにすぎない。この場合、「国語」には、「標準語」にあたる話ことばも含まれるが、基本的には本研究で取り上げる「現代モンゴル語の書きことば」がそれに当たると考えられる。この新しい書きことば自体が「標準語」の基礎となる「基礎方言」と古典的なモンゴル文語(古い書きことば)との「言文一致」の産物であり、その形成過程には文体の口語化のみならず、遊牧民のことばであったモンゴル語方言と17世紀に成立した古典的なモンゴル文語の中に近代社会に機能できるおびたしい「近代語彙」が導入されていた。本研究を進めた背景には、報告者による「モンゴル語近代語彙の形成」という先行研究の基盤があった。実際、本研究は、「モンゴル語近代語彙の形成」という研究の延長線、または拡大版である。

2. 研究の目的

20世紀30年代までロシア連邦のブリヤート共和国とカルムイク共和国はモンゴル国及び中国の内モンゴル自治区などと基本的に共通のモンゴル語書きことばを使用してきた。その後各地の「基礎方言」に基づく新しい書きことばが生まれた際も古い書きことばが基礎となり、話ことばとの相互の影響を受けながら発展してきた。20世紀にモンゴル民族は政治的に分断された一方、共通の社会主義陣営で言語的統合もあった。特に、モンゴル国と内モンゴルの場合はそうであった。本研究はこれまでの研究の蓄積を踏まえ、モンゴル語の新しい書きことばの形成過程をその歴史的、社会的背景から文献資料の考察により、「現代モンゴル語」とは何か、または、「モンゴル語」とは何か、という現代社会生活に求められる基本的な問題への回答を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

これまでの研究では、現代モンゴル語書きことばの語彙の重要な一環である「近代語彙」の初期の出典を漢字語からの翻訳借用過程の考察によって明らかにし、ロシア語からの翻訳が多く含まれるモンゴル人民共和国の近代語彙が第二次世界大戦後内モンゴルのモンゴル語に普及したプロセスを歴史の流れから把握していた。

現代モンゴル語の文法体系について、モンゴル人民共和国の「国語」の成立に重要な役割を果たしたモンゴル人民共和国の言語学者である Sh.ロブサンワンダンの研究の社会的背景及びその内容を考察し、具体的には「ロブサンワンダンの文法」(*MongGul kelen-U jui*, UlaGanbaGatur 1939)がそれまでのモンゴル語文法書のようにモンゴル文語中心ではなく、モンゴル語ハルハ方言に基づいていることに注目し、それが中国領において、内モンゴル自治区側で出版された最初のモンゴル語文法書であるチンゲルタイの『モンゴル語文法』(“*MongGul kelen-U jui*” UlaGanqota 1949)としてほぼ再版に近い形で出されたことから、Sh.ロブサンワンダンの研究が内モンゴル側のモンゴル研究にどのような影響を与えてきたか、これまでの研究を踏まえて考察を続けた。チンゲルタイはその後、中国領内のモンゴル諸語の調査を指導し、報告したことで中国を代表するモンゴル語研究者となり、その調査の成果が Sh.ロブサンワンダンによるモ

ンゴル語方言分類にも貴重な基礎資料を与えた。それが、Sh.ロブサンワンダンが現代モンゴル語、つまり、現代モンゴル語書きことばの「基礎方言」を論ずるうえでかけがえのない重要な根拠となった。

このように、本研究では現代モンゴル語の書きことば形成の問題を、モンゴル人民共和国と中国の内モンゴル側のモンゴル人研究者たちそれぞれの研究の特徴や長所からも分析することにより、それまでの内モンゴル側がモンゴル人民共和国側の影響を一方向的に受けてきたというような視点に修正を入れ、内モンゴル側での方言調査の結果がモンゴル人民共和国側の「現代モンゴル語」、または「現代モンゴル語書きことば」の考え方に対して理論的に、実績的に重要な影響を与えたことについて、具体的に、モンゴル諸語、モンゴル語方言分類の歴史を考察するという方法によって論じた。

4. 研究成果

(1) モンゴル語の「言文一致」の研究

モンゴル文語は「前近代」において、翻訳を通して漢文、また漢字語彙の影響を受けていたため、近代におけるモンゴル語の「言文一致」の進行過程において漢文体の影響がどのように変化してきたのか、本研究ではまずこういう問題に注目し、こうした視点を含め、モンゴル語の「言文一致」の問題を、漢字圏同様、文体と文字の読み方、つまり、モンゴル文語体の「改革」及び、モンゴル文字の読み方の規範化という視点からモンゴル文語、または、古いモンゴル語書きことばと口語体及び口語の発音との関係で考察した。具体的には、伝統的なモンゴル文字を「前近代」の文字という観点から、現在もモンゴル文字を使用し続けている内モンゴル自治区におけるモンゴル語規範の問題に焦点を当てて論述し、内外モンゴルを含め、これまで議論されてきたモンゴル語の文字問題は、つまり、現代モンゴル語の言文一致の問題であるという結論を付けた。

(2) 現代モンゴル文学の研究

現代モンゴル文学の問題は、現代モンゴル語書きことばの形成と関連性が深い。そのため、本研究では現代モンゴル文学作品の文体の変化に注目し、内モンゴルの代表的な詩人であったナ・サインチョグトの名詩 *ElesUn mangqan-u eke nutuG* (砂漠のふるさと) の文体に着目し、それにより、これまでの内モンゴルの文学研究においてこの名作の分析に1947年12月の出典が使用されず、その後の再版のバリエーションが使われてきたという重要な問題を指摘した。

(3) モンゴル語定期刊行物の研究

現代モンゴル語書きことばの形成にとって、モンゴル語の定期刊行物は基本資料となる。そのため、本研究では、1930年代、40年代に満州国で刊行されたモンゴル語雑誌の貴重なコレクションの刊行を続けてきた。

(4) モンゴル語方言分類の研究

現代モンゴル語書きことばの形成という研究テーマにとって、「モンゴル語」の定義にもかわる問題として欠かせないのは方言分類における「モンゴル語」についての分析であった。本研究は、20世紀初期からロシア・ソ連の学者たちが試みたモンゴル語の方言分類、特に、1950年代初期にソ連の学者G. D. サンジェーエフが行った分類に対し、モンゴル人民共和国の学者Sh. ロブサンワンダンが1959年にウランバートルで開催された第一回国際モンゴル学会で行った議論等について分析を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 フフバートル	4. 巻 968
2. 論文標題 モンゴル語の方言分類にみることばと民族 モンゴル人学者Sh. ロブサンワンダンの分類を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 フフバートル	4. 巻 964
2. 論文標題 モンゴル文語とモンゴル語の言文一致の問題 「前近代」の文字を使い続ける内モンゴルの言語規範	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 12-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Huhbator, B.	4. 巻 1
2. 論文標題 SOVIET SCIENTIST G. P. SERDYUCHENKO AND THE " LITERARY LANGUAGE " : HISTORICAL FEATURES OF THE DEVELOPMENT OF THE LITERARY LANGUAGE OF THE MONGOLIAN PEOPLE'S REPUBLIC AND THE MONGOLS OF INNER MONGOLIA BASED ON ARCHIVAL MATERIALS OF THE 1950s -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Bulletin of the Buryat Scientific Center of the Siberian Branch of the Russian Academy of Sciences	6. 最初と最後の頁 48-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 フフバートル	4. 巻 948
2. 論文標題 蒙疆政権時代の新聞 MongGul-un sonin sedgUl に発表されたモンゴル語新語 - 蒙疆政権側が翻訳したモンゴル語近代語彙研究の新たな展開を目指して-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 34-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 フフバートル	4. 巻 949
2. 論文標題 ケンブリッジ大学所蔵満洲国発行モンゴル語雑誌『大青旗』(Yeke k0ke tuG)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 424-442
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 フフバートル	4. 巻 0
2. 論文標題 現代モンゴル語体系の形成に対しTs.ダムディンスレンが果たした役割 歴史社会言語学の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 モンゴル科学アカデミー言語文化研究所編『Ts.ダムディンスレン生誕110周年記念論文集』(モンゴル語)	6. 最初と最後の頁 164 - 183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 5件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 モンゴル語の方言分類にみる「基礎方言」の問題
3. 学会等名 第十回 日中国際ワークショップ プ「現代中国における言語政策と言語継承—多言語の視点から」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 モンゴル語における「言文一致」の問題とOpchin tsagiin mongol khel (現代モンゴル語)の形成
3. 学会等名 「駒場言文一致科研・講演会」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 策本・札木察拉諾 (Tseben Jamtsrano) 的 Khubiskhal 的用意與蒙古語 “革命” 一詞的形成 (ツェヴェーン・ジャムツアラノの Khubiskhalの意味とモンゴル語の「革命」という概念の形成)
3. 学会等名 「近代における言文一致・国語施策と東アジア」国際シンポジウム (東京大学) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 現代モンゴル語体系の形成に対しTs.ダムディンスレンが果たした役割 歴史社会言語学の視点から
3. 学会等名 モンゴル科学アカデミー言語文学研究所主催「モンゴル国作家、科学アカデミー会員Ts.ダムディンスレン生誕110周年記念国際シンポジウム」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 ケンブリッジ大学所蔵満洲国発行モンゴル語雑誌Yeke kOke tuG(大青旗)について
3. 学会等名 20世紀メディア研究所 (早稲田大学)「第122回研究会」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 ソ連顧問G.Pセルジュチェンコと内モンゴルの標準語 公文書館資料にみる1950年代のモンゴル人民共和国と内モンゴルの言語の関係
3. 学会等名 国際モンゴル学会主催「第二回アジア大会」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 フフバートル
2. 発表標題 20世紀初期のモンゴル語定期刊行物 研究の現状とモンゴル研究における意義
3. 学会等名 モンゴル国立教育大学主催国際シンポジウム「モンゴル研究の新しい時代」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 フフバートル	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和女子大学国際文化研究所発行 インターブックス制作	5. 総ページ数 613頁
3. 書名 蒙文学会UlaGan bars (『丙寅』) 誌第三期・第八期(六号)・第九号・第十号	

1. 著者名 フフバートル	4. 発行年 2022年
2. 出版社 インターブックス	5. 総ページ数 145頁
3. 書名 満洲国蒙政部発行Mong ul sedgUl『蒙古報』表紙・目次翻訳	

1. 著者名 フフバートル共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 成文社	5. 総ページ数 63 - 75
3. 書名 広川佐保編『近代内モンゴルにおけるモンゴル語出版物の歴史 出版社と知識人を中心に』	

1. 著者名 主編 フフバートル (Tuvshinbayaryn Huhbaatar)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Ulaanbataar Mongolia	5. 総ページ数 325
3. 書名 XX Zuuny Mongolyn Ertunts: Ergen kharakh ni (Mongols in the 20th century)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------